

令和6年度研究開発自己評価書

I 研究開発の内容

1 教育課程

(1) 編成した教育課程の特徴

①研究開発課題

特別支援教育における、変化する社会で生き抜くための資質・能力とエージェンシーを育成する教育課程及び指導方法の研究開発
—新領域「私の時間」の実践を通して—

②研究の概要

本研究は、特別な教育的ニーズを有する生徒に対する「変化が激しい社会の中で生き抜くために必要となる資質・能力であるエージェンシーの育成を目指すための教育開発」であり、これまで本校で取り組んできたキャリア教育を発展させ、新領域「私の時間」を創設する。新領域「私の時間」を基軸に、教育課程の編成・授業における指導方法及び評価方法の研究に取り組み、以下の二点を研究開発する。

- (ア) 新領域「私の時間」の教育内容を開発し、教育課程及び指導方法について研究する。新領域「私の時間」の学びの充実に向けて、ICT支援ツールであるEdTech「Ne!クスト」を開発する。
- (イ) 新領域「私の時間」の学びを通して現れた生徒の教育ニーズを把握しながら、個別の教育支援計画の在り方を再検証し、発達段階に応じ学校種を越えた切れ目ない支援システムの提言を行なう。

③研究の背景

本校は、これまでキャリア発達支援を大切にし、教育を行なってきた。具体的には、「生徒が生涯にわたって、より豊かに生きること」を目指し、生徒の生涯を想定しながら、育成を目指す資質・能力を明らかにし、それを実現できる教育課程の改善を行なった（基礎研究 H30-R2）。研究のまとめにおいて、生徒が資質・能力を着実に獲得するためには、生徒自身が自ら学びに向かう力が必要であり、本校の教育課題を「よりよい未来に向かって、自分で働きかける力」と整理した。

その教育課題の達成に向けたカリキュラム開発を行なおうとしたのが本研究であり、解決に向けてOECD Education 2030における「エージェンシー」を手がかりとした。エージェンシーとは、これからの変化が激しい社会を生きる全ての人にとって重要な能力とされており、言わば「周りとの関係性を重視した主体性」である。エージェンシーは本校における教育課題「よりよい未来に向かって、自分で働きかける力の育成」や、今まで本校が大切にしてきたキャリア発達支援と親和性が高いと考察した。そこで、本校はエージェンシーに着目し、それを育むカリキュラム開発を、新領域「私の時間」を創設することで実現しようとした。

④ 研究の仮説

(ア) 研究仮説

生徒が、新領域「私の時間」の学習に取り組むことによって、エージェンシーを発揮するために必要な資質・能力の獲得ができるのではないか。

(イ) 本校におけるエージェンシーの定義

本校では、エージェンシーを「周りとの関係性を重視した主体性」と定義している。生徒が「周りとの関係性を重視した主体性（エージェンシー）」の発揮を目指すためには、その主体性を身につけ、そのために必要な資質・能力の獲得が必要だと考察している。

(ウ) 本校におけるエージェンシーを発揮するために必要な資質・能力とは

本校は、エージェンシーを発揮するために必要な資質・能力を「よりよい未来に向けて、変化を起こすために目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動をとる資質・能力」と定義した。

(エ) 研究仮説の検証のために

研究仮説の検証に向けて、「授業の有用性」と「生徒の変容」の視点から消火をするため、アンケート等の実施計画を立てた。4年次研究は、授業実践を通して「生徒が、新領域『私の時間』の学習に取り組むことによって、エージェンシーを発揮するために必要な資質・能力の獲得ができたか」について評価し、研究仮説を検証した。検証を行なうため、以下に示すアンケート調査及び分析等を行なった。

- ・新領域「私の時間」アンケートの分析（生徒・教師）
【R6年4月～R7年3月各単元アンケート（事前・事後）】
- ・学校の授業に関する意識アンケートの分析（生徒）【R6年9月・12月】
- ・校内研修会後のアンケートの分析（教師）
【R6年4月・5月・7月・8月・11月】
- ・「私の時間」の有用性に関するインタビュー調査（教師）【R6年12月】
- ・学校評価アンケート（保護者）【R5年12月】

⑤ 必要となる教育課程の特例

(ア) 新領域「私の時間」を設置

- ・新領域「私の時間」を新設し、本校独自の育成を目指す資質・能力、新領域の目標や見方・考え方等を規定する。
- ・新領域「私の時間」を教育課程に各学年年間35時間程度設定する。その際、既存の教科・領域（総合的な探究の時間、自立活動、特別活動等）と新領域「私の時間」との関係性をもとに時数を調整する。
- ・新領域「私の時間」と既存の教科・領域との関係性を整理し、新領域「私の時間」を効果的に運用するため、教育課程における「キャリア教育」に関係する学習内容と横断的・弾力的・効果的に往還できるようにし、相互の関連を図りやすく、効果的な学習活動が行えるようにする。

(イ) 新領域とする必要性

本校では、エージェンシーの発揮に必要な資質・能力の獲得に、「よりよい未来に向けた、自己と向き合う系統的な学び」「生徒の特性等に合わせた個別最適な学び」「小中学校との連続性を図り、高等部から社会へと続く生徒の将来を見通す学

び」が必要と考えた。

したがって、本校はこれらの学びを実現するために、既存の教科・領域ではなく、被履修化も含め、新たな領域とすることで教育効果を見込めると考え、新領域「私の時間」を設置し、研究開発課題に迫っている。

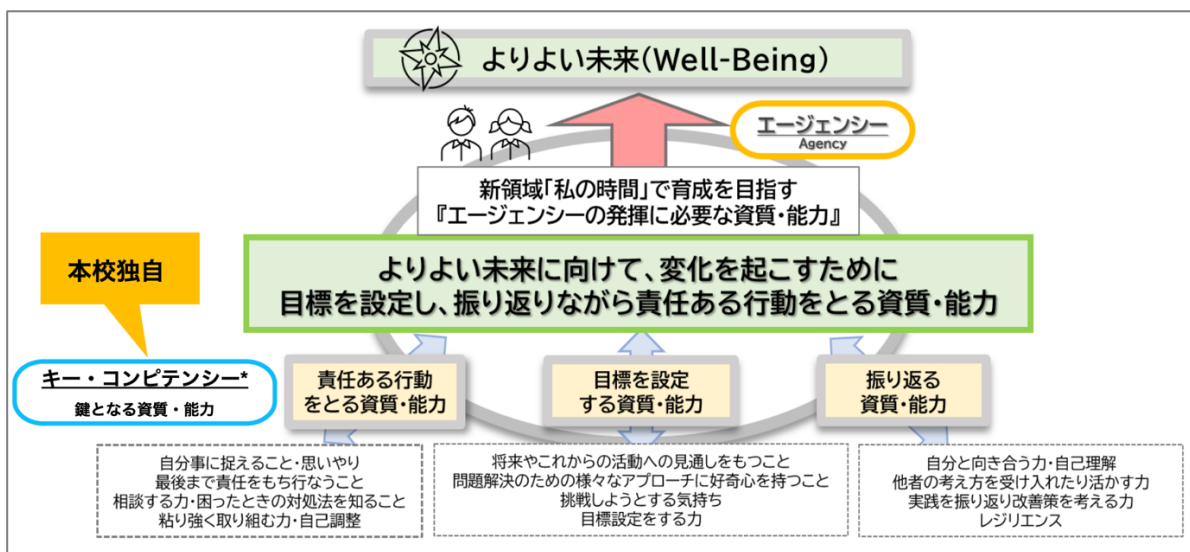
(ウ) 必要となる教育課程の特例に関する今後の方向性

今後「新領域『私の時間』によって、エージェンシーの発揮に必要な資質・能力の育成ができたか」「生徒の実態にあわせ、どのような指導方法が効果的か」等の視点に立って研究評価を行ない、その内容について見直していく。

(2) 教育課程の内容は適切であったか

①新領域「私の時間」の目標・内容の設定

2年次研究では、エージェンシーは「周囲の関係性を重視した主体性」ということから、エージェンシーの発揮に必要な資質・能力は、学習指導要領で示される資質・能力を総動員させたものであり相互に関連するものだと考えた。その上で、エージェンシーの発揮に必要な資質・能力は「目標を設定する資質・能力」「振り返る資質・能力」「責任ある行動をとる資質・能力」の3つの資質・能力で構成されるものとした。エージェンシーの発揮に必要な資質・能力を構成する3つの資質・能力は、学習指導要領で示される資質・能力及びその三つの柱との混同が課題に上がったため「キー・コンピテンシー」と呼ぶことにした。さらに、各キー・コンピテンシーの構成要素を明らかにした(図1)。



(図1) エージェンシーの発揮に必要な資質・能力とその構成要素

各キー・コンピテンシーには序列や段階があるということではなく、相互に関連し、それが一体的に働くことでエージェンシーの発揮に必要な資質・能力となると考えた。エージェンシーの発揮に必要な資質・能力は、各教科等で育成を目指す資質・能力と相互に関連付けられた(結晶化・統合された)資質・能力と捉え、新領域「私の時間」は他教科等の各々の学びを現在や将来の暮らしと結びつけ、自らのよりよい生き方・在り方等へ舵取り・調整する学習となるよう開発した。

3年次研究では、新領域「私の時間」の目標と内容を他教科等との関係性と共に整理することが課題に挙げられたため、新領域「私の時間」の目標・内容・指導計画

・内容の取扱い等について、これまでの研究を総括し、学習指導要領の示し方に倣い以下のように示した設定した。

第1の1 新領域「私の時間」の目標

私の時間の見方・考え方を働かせ、自分を取り巻く状況を受け入れ、他者や社会との関わりの中で自分らしい生き方を自ら考えて実現しようとするエージェンシー（周囲との関係性を重視した主体性）の発揮に向けた「見通し・実践・振り返り」の学習サイクルを通して、「よりよい未来に向けて、変化を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる資質・能力」を育成することを目指す。

第1の目標は、大きく分けて2つの要素で構成している。一つは、新領域「私の時間」の見方・考え方を働かせて、私の時間の学習を行なうことを通し、自己のよりよい生き方を考えながら、課題を発見し解決して自分らしい生き方を自ら考えて実現しようとする私の時間の学習過程の在り方である。もう一つは、私の時間を通して育成を目指す資質・能力である。

「私の時間の見方・考え方を働かせる」とは、エージェンシーの発揮に必要な資質・能力を育成するための学習課題となる「現在・過去・未来と自分、周囲と自分との関係性をもとに、自分の生き方あり方を考え、自分の人生を自分事にしていくこと」としている。

「自分を取り巻く状況を受け入れる」とは、主体である自分自身や、働きかけた際の友人・家族・自分の所属する団体や国などの影響、それに伴う経済や環境等の社会的側面の在り様や変化などを予測したり受け入れたりすることと考えられる。学習者がよりよい未来に向かって自分らしい生き方を自ら考えて実現しようとするよう、個人だけでなく場や状況等の周囲との関係性を重視し学習を行なえるようにする。

学びの充実を図るために、自分で先を見通して計画を描いて、実践し、実践を振り返って経験から新しい知識を抽出したり次の予測や目標につなげたりするような学習サイクルで構成することとした。（以下、AAR サイクル）

私の時間を通して育成を目指す資質・能力は、エージェンシーの発揮に必要な資質・能力「よりよい未来に向けて、変化を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる資質・能力」としている。

第2 内容

内容は、エージェンシーの発揮に必要な資質・能力を構成する3つのキー・コンピテンシー「目標設定をすること」「責任ある行動に関すること」「振り返りをすること」の構成要素を項目として扱うものとする。

内容を、以下に示す。

(1) 目標設定

- ア 将来やこれからの活動への見通しを持つこと
- イ 問題解決のための様々なアプローチに好奇心を持つこと
- ウ 挑戦しようとする気持ち
- エ 目標設定をする力

(2) 責任ある行動

- ア 自分事に捉えること
- イ 思いやり
- ウ 最後まで責任をもち行なうこと

- エ 相談する力
- オ 困ったときの対処法を知ること
- カ 粘り強く取り組む力
- キ 自己調整
- (3) 振り返り
- ア 自分と向き合う力
- イ 自己理解
- ウ 他者の考え方を受け入れたり活かしたりする力
- エ 実践を振り返り改善策を考える力
- オ レジリエンス

「第2 内容」では、私の時間の内容をエージェンシーの発揮に必要な資質・能力を構成する3つの資質・能力である「目標設定」「責任ある行動」「振り返り」を扱うとした。ア 以下は、各内容の具体的な項目であり、キー・コンピテンシーの構成要素である。

第3の1 指導計画

指導においては、児童・生徒の実態に合わせ、第2内容を年間の単元計画に反映させ、キー・コンピテンシーを一体的に育成できるようにする。その際、現在・過去・未来と自分との関係性をもとに、自分についての理解を深め、自身の生き方やあり方を考え、人生を自分事にしていくことができるよう「自分自身に関する課題」「今に関する課題」「よりよい未来に関する課題」の学習課題を設定し内容を配列する。私の時間における学びは、他教科等で身につけられた資質・能力に関連付け、学習や生活において相互に働きかけるようにする。

学びの充実を図るために、自分で先を見通して計画を描き、実践に移し、実践を振り返って、経験から新しい知識を抽出したり次の予測や目標につなげたりするような Anticipation (見通し・予測)-Action (実践)-Reflection (振り返り) のサイクル (以下、AAR サイクル) で構成する。

第3の2 内容の取扱い

内容の取扱いにあたっては、次の事項に配慮するものとする。

- (1) 学習者は、領域「私の時間」において、「よりよい未来」について考え、そのために自身がなりたい姿・状態を「自己理解・自己分析」し、「自分自身の目標や目標達成のために学校生活でどのように学んでいくかを考えた計画」を立てられるようにすること。
- (2) 学習者は、多様な視点を踏まえて、自己分析をすること。支援者は、特別なニーズを必要とする学習者が自分自身をより具体的に考察できるよう特性や実態にあわせた支援をすること。
- (3) 学習者は、目標達成に向けて実践をし、振り返りをする事。
- (4) 学習者は、協働的な学習を通して、よりよい未来に向かうための多様な視点や方策を得ること。
- (5) 学習者は、よりよい未来に向かって自分自身で学びを舵取り・調整することを繰り返すことによって、責任ある行動をとろうとする態度を養うこと。

②編成した教育課程の特徴

(2) ①に基づいて、新領域「私の時間」を、教育課程に各学年年間 35 単位時間設定し、その学習を通してエージェンシーの発揮に必要な資質・能力の育成を

指す教育課程を編成した。編成された教育課程の特徴は「新領域『私の時間』を全学年で毎週1時間、年間35時間で実施したこと」「新領域『私の時間』の年間35時間の実施のため、総合的な探究の時間、特別活動（HR）、専門教科、家庭科の時数を削減し内容を調整したこと」「新領域『私の時間』の内容を、キー・コンピテンシーを系統的に配列したものにしたこと」である。以上のように編成した教育課程は「教育課程表（資料1）」である。

（3）授業時間等についての工夫

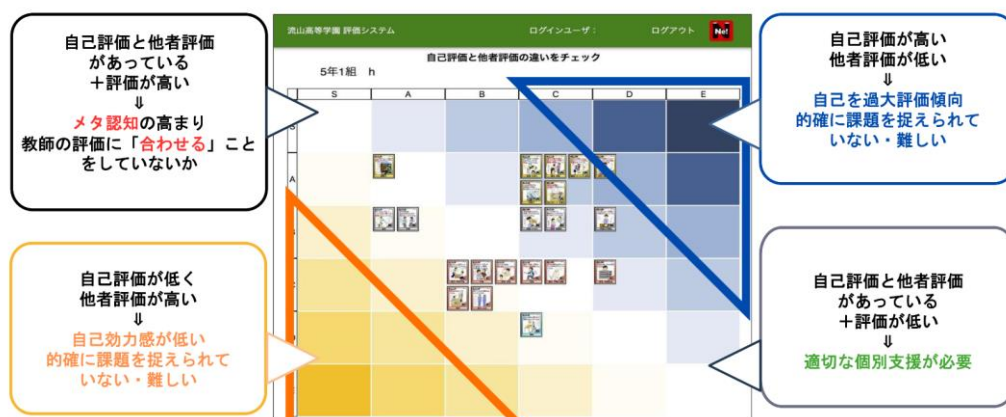
2年次までの新領域「私の時間」は、1時間から4時間までのまとまった時間の枠で2週間から1か月毎のサイクルで実施してきた。3年次からは、新領域「私の時間」の学習サイクルを短くし、学校生活の実践と接続しやすくできるよう週1回1コマの実施を計画した。実施スパンを短くすることで、「見通し・実践・振り返り」のサイクルを多く回せるようにし、一体的にキー・コンピテンシーの育成を目指した。また4年次からは、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実の視点から、各単元の目標や学習内容、教材・教具の見直しを行ない、実践の場と想定される他教科等や学校行事の時期との関係を踏まえて実施時期や時数配分の最適化も図った。計画した新領域「私の時間」の指導計画を「年間指導計画（資料2）」で示す。

2 指導方法・教材等

（1）実施した指導方法等の特徴

①ICT支援ツールEdTech「Ne!カスタム」の開発・運用

本校の教育課題でもあった、生徒の「自己評価と他者評価の乖離」「自分を俯瞰して見るのが難しい実態」「他者の意見を受け止める力の課題」といった諸課題に対する取り組みとして、独自のICT支援ツールEdTech「Ne!カスタム」をWebシステムとして開発し、運用した。生徒が「Ne!カスタム」を活用した自己分析で、自分の強み・課題の自己理解を深め（図2）、「なりたい自分」を目指し、目標設定シートを活用して今後の学習目標を立てる学習に取り組み、自分の学習を自己調整していく力を育てる



（図2）Ne!カスタムによる自己分析の画面

るように授業を構成している（図3）。

生徒にとっては、Ne!カスタムを活用して自分自身を「メタ視点」から見つめることで、「メタ認知」を高めるための足場掛けとなることをねらっている。また、対話的な学びを通して、教師と目標達成に向けた方策を共有したり、改善したりする

ことで、他者視点を踏まえながら生徒が自分の学びを舵取りできるようにしている。

Ne!クストは教師にとって、実践を通じて生徒の教育ニーズを把握するだけでなく、生徒それぞれの思考傾向を掴み、実態を見立てるための参考指標としての可能性を感じている。

また、現システムは本校の設定した資質・能力の項目（ステカ）で設計されているが、他校種・他障害種の学校においても運用できるよう、

各学校の資質・能力の項目（大項目や小項目の階層・数・種類・ルーブリック）を設定できるようにした。4年次では、Ne!クストに関心を示してもらった他県の特別支援学校にシステムのデモアカウントを共有し、実践を依頼している。

②学習評価を効果的に生かした指導・支援

新領域「私の時間」の学習評価を効果的に生かした指導・支援の検討を行ない、生徒のエージェンシーの発揮に必要な資質・能力を育成するためには、教員教師が生徒のエージェンシーの発揮に必要な資質・能力を獲得したりエージェンシーを発揮したりしている「学びの姿」を的確に捉え、それを教員教師の指導改善、生徒の学習改善につなげることが大切であること考察した。

生徒の「学びの姿」を的確に捉えるためのポイントとして「私の時間での姿を、ルーブリックやアンカー等の具体的な評価規準で捉えること」「私の時間の前後の学習での変化を、発言・記述・行動等の様子で捉えること」「私の時間以外の発揮の様子を、発言・記述・行動等で捉えること」の3つをまとめた。また、エージェンシーの発揮に必要な資質・能力の育成のためには「生徒が自身の学びの過程を振り返り、言語化・対話できること」「教師を含めた他者からの価値づけ、環境要因の後押しを加えること」を重視している。生徒が自らの振り返りにつなげられるように的確に生徒の学びの姿を捉え、適当なタイミングでそれらを生徒へ価値づけできる対話的で協働的な学習機会の設定を設定し、教師がフィードバックできるように指導計画を設定している。

③個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実の視点からの授業改善

生徒が着実にキー・コンピテンシーを獲得し、エージェンシーの発揮を促すことができるカリキュラムとするために、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実の視点から、学びの充実のために必要な授業づくりの視点を整理した。その際「学習者主体」を重視するため、個別最適な学びを「学習者主体」と「学びの個別最適化」の2つの視点とし、「協働的な学び」を含む3つの視点で整理した。

(2) 指導方法等は適切であったか

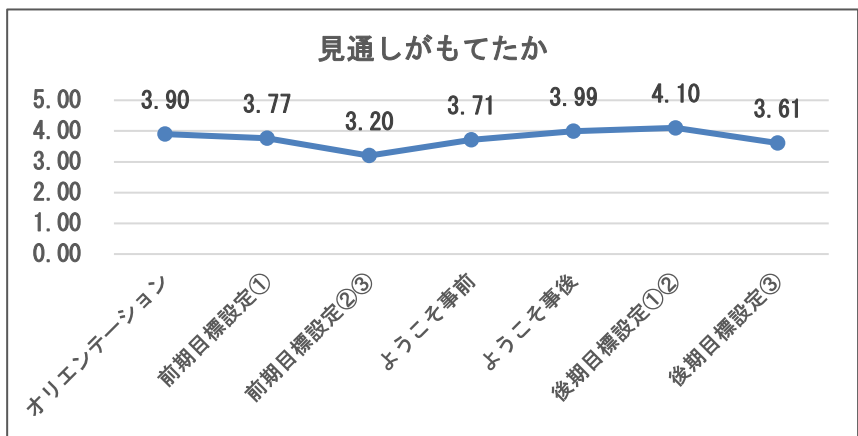
生徒がキー・コンピテンシーを着実に獲得するためには、AARでの学習サイクル

流山高等学園 評価システム		ログインユーザ:	
目標設定シート【作業能力】 5年1組 h			
NO.	ごもく項目		
いまのじぶん	なりたいじぶん	【書くせん】どのばめんとくむむ?	【書くせん】どのようにとくむむ?
今の自分	なりたい自分	【作る】どの場面を取り組む?	【作る】どのように取り組む?
【基本的習得】身だしなみ			
C	A	専門教科が始まる前の準備時間に	鏡を見て、服装が整っているか確認する。また、友達にもチェックしてもらう。
【態度・姿勢】協力・共同作業			
C	B	教室清掃の仕事をするとき	机を動かすとき等。仲間がペアになっているか確認し、1人場合は手伝うようにする。
【態度・姿勢】掃除			
D	B	専門の後片付けの時	自分の担当場所の掃除が終わったら、他に掃除が必要な場所を仲間に聞かせるようにする。

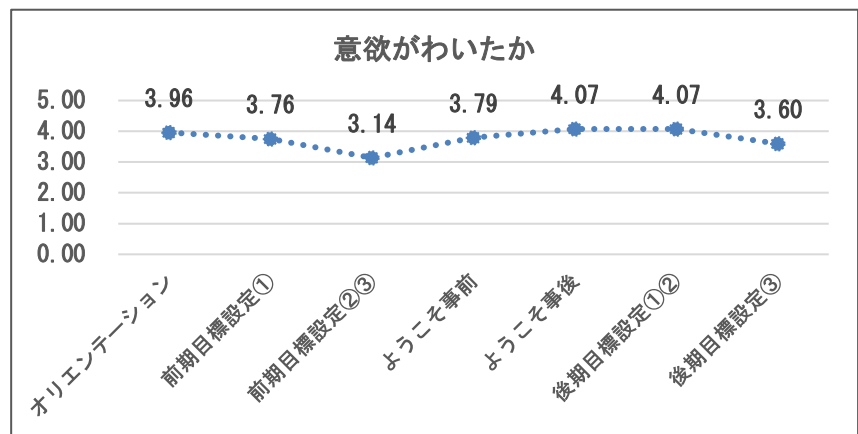
(図3) Ne!クストによる目標設定シートの画面

で学びを進めていくことが大切である。そこで生徒が見通しを持つことで、学習の意欲が高まると予想し、校内研究にて授業づくりを行なってきた。そうした指導方法の検証をするために、生徒に対して新領域「私の時間」の各単元の学習終了後、学習の見通し（図4）と意欲（図5）に関するアンケート調査を行なった。

結果から、生徒の回答の平均値を出すと、高い数値で推移していることが分かった。その中でも、前期目標設定においては、初めて経験する1年生と、すでに学習に取り組んでいる2・3年生の差が出る結果となった。このことは、進級し、自分の立場が変わってから立てる目標が、本当に自身を成長させることに繋がるのか、生徒の不安な気持ちが背景にあるのではないかと考察した。全体的に見通しが持てた生徒は意欲も高まる傾向にあり、るための教師のサポートが必要になると考えている。



(図4) 今後の学習に見通しが持てたか。

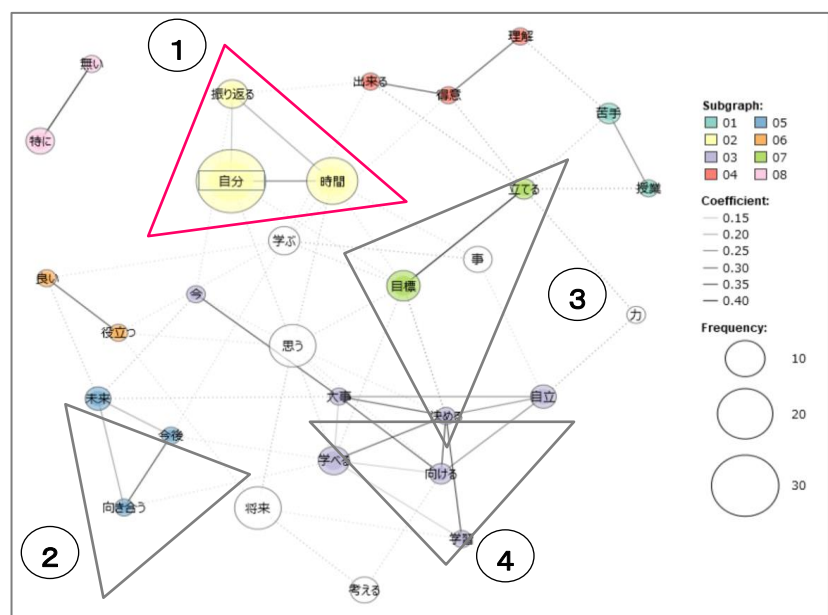


(図5) 今後の学習に意欲がわいたか

また、「学校の授業に関する意識調査アンケート（後期）」において、3年生を対象に「私の時間はどんなことが学べる時間だと思いますか」という質問に対し、自由記述で回答を得て

(n=75)、KH coder を使用してテキストマイニング分析を行なった（図6）。

結果から、一番多く挙げたワードは「自分」であり、共起関係をみていくと①「自分-振り返る-時間」と示さたていた。またその他のワードと共起関係に注目すると、②「今後-未来-向き合う」③「目



(図6) 私の時間はどんなことが学べる時間か

標-立てる-決める」④「自立-向ける-決める」等が挙げられた。このことから、生徒が私の時間の意義や目的をそれぞれの視点で理解し、学びを進めていけたことが分かった。よって、指導方法等は概ね適切であったと考える。

Ⅱ 実施の効果

1 生徒への効果

新領域「私の時間」の生徒への効果を検証するために、「授業に関する意識調査アンケート」において「流山高等学園の授業の中で、自分の人生や生き方を深く考えることに繋がる教科」について質問した(表1)。結果から、前期は「私の時間」と答えた生徒が19.2%で全体の3位。後期は23.9%で全体の1位となった。これは専門学科を設置する教育課程の根幹である専門教科と双壁をなす結果となり、職業を含めた3つの教科が中軸となっていることが分かった。このことから新領域「私の時間」の意義やねらい等が、これまでの実践を通して着実に生徒に浸透していること考える。

(表1) 自分の人生や生き方を深く考える教科

	R5 後期 (n=246)	R6 前期 (n=249)	R6 後期 (n=245)
1位	専門教科 (23.3%)	職業 (22.5%)	私の時間 (23.9%)
2位	私の時間 (21.6%)	専門教科 (20.0%)	専門教科 職業 (同率 20.2%)
3位	職業 (17.2%)	私の時間 (19.2%)	

2 教師への効果

4年次研究の校内研究において、「エージェンシーの発揮に必要な資質・能力を身につけるためのよりよい授業の在り方とは」をテーマに、のグループに分かれてグループディスカッションを行ない、授業改善の3つの視点(学習者主体、学習の個別最適化、協働的な学び)を元に協議内容を整理した。結果、3つの視点以外に「教師の関わり方」「教師の役割」を重視する意見が半数以上のグループから挙げられた。その意見を「教師に必要な資質・能力と専門性」という視点で以下のとおり整理した。

教師に必要な資質・能力と専門性(流山高等学園 ver)

- (1) 信頼関係とリラックスした環境
→ 生徒が安心して自己表現できる雰囲気づくり
- (2) 生徒の声を重視する姿勢
→ 生徒の意見を受け入れ、尊重し、やる気を引き出す
- (3) 生徒が自己肯定感を実感できる支援
→ 生徒が自分自身を肯定し、自己実現できるような支援
- (4) 対等な関係の構築と対話の促進
→ 対等な立場で考え話し合い、自己実現・表現を支援
- (5) 目標設定と振り返りの重視
→ 目標を共有し、道筋を考え、振り返りを通じて学びを促進
- (6) 外部資源や地域との協働
→ 地域や企業との協働で興味関心にあった学びを提供
- (7) 自分自身(教師)の成長
→ 教師エージェンシー・教師のウェルビーイング

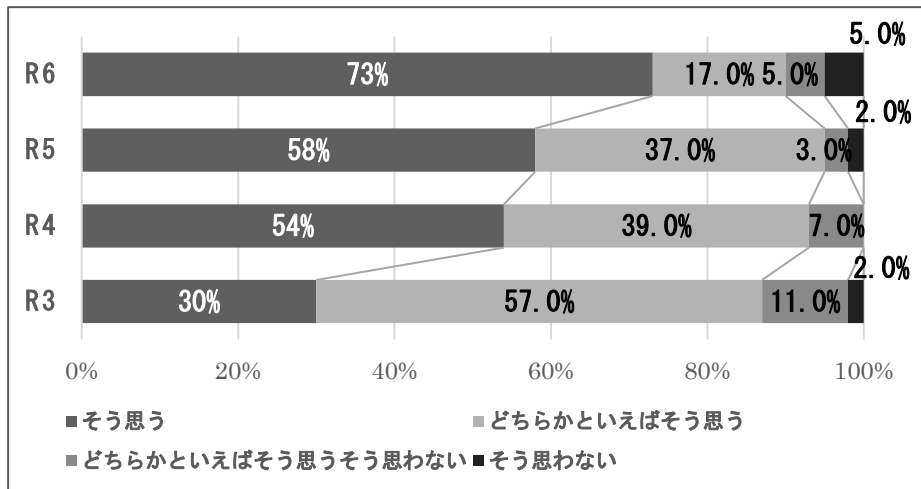
校内研修を進める中で、本校が生徒の学びを支える教師の在り方について、自発的

に意見が挙がり議論ができる環境になっていることは、研究の成果が教師に浸透している結果でもあると考える。

3 保護者等への効果

保護者へ新領域「私の時間」周知に関して、学校評価アンケートを用いて検証した。「研究開発学校として指定され、『私の時間』という新しい授業に取り組んでい

ることを理解しているかについて、4件法で質問をし、回答を得た(図7)。本年度は「そう思う」が73%となり、保護者の認知も高まったと考える。課題としては、昨年度と比較すると「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の回答の割合が高いことが分かる。



(図6) 保護者の「私の時間」に対する認知度について

中でも1年生の保護者が約25%否定的な回答をしている。保護者会やSNS・ホームページを活用した広報活動等、保護者への周知については改善の余地がある。

Ⅲ 研究実施上の問題点と今後の課題

※実施報告書(要約)参照